# 雑誌『黎明』を読む ―精神医療と雑誌文化の重なり合う場のエコノミー―

A Study of *Reimei* Journal:
Psychiatry, Magazine Culture, and Ego-documents in Modern Japan

竹内瑞穂
TAKEUCHI Mizuho

キーワード：中村古峡療養所、中原中也と〈共鳴〉する読者、エゴ・ドキュメント

## はじめに ― 雑誌『黎明』について

中村古峡（本名：蓊（しげる）一八八一－一九五二）は、もとは夏目漱石門下の小説家として世に出た人物であった。代表作に弟の精神病発症を題材とした自伝的小説『殻』（『東京朝日新聞』一九一一・七－一二）がある。その後、次第に軸足を心理学研究へと移し、大正期の〈変態〉ブームの一端を担った雑誌『変態心理』（一九一七創刊）の主幹として活躍する。

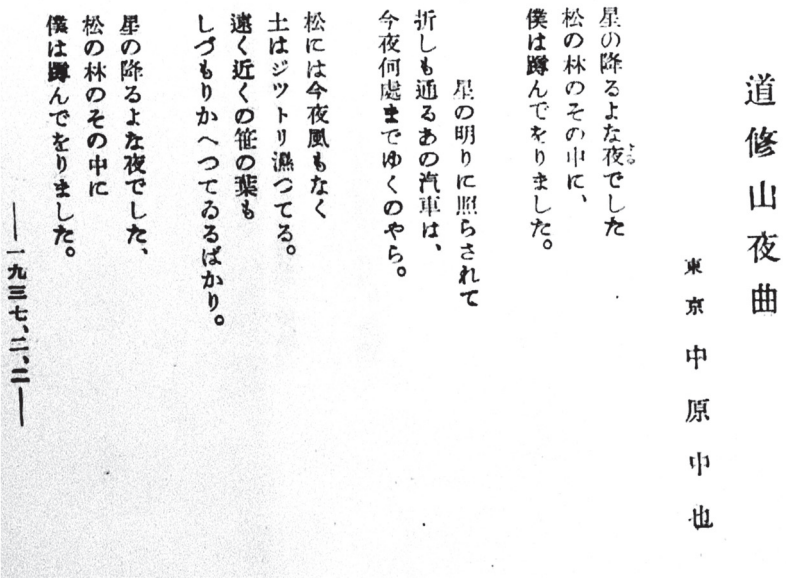
『変態心理』は経営上の問題もあり、一九二六年には休刊となるが、古峡は同年四五歳で東京医学専門学校に編入学し、二年後には医師免許を取得。以後は精神科医として東京・品川の診療所[1]と千葉・千葉寺の中村古峡療養所（一九三四開所）を経営しつつ、直接患者の治療に携わった。

これだけ変転を重ねたにもかかわらず、古峡は物が捨てられない人であった。関東大震災やアジア太平洋戦争下の空爆によって失われたものも多かったようだが、療養所の後継である中村古峡記念病院には、今でも彼が遺した書簡・日記・書籍・療養日誌、その他各種資料からなる資料群が保管されている。

本論がとり上げるのは、そのうちに残されていた雑誌『黎明』である。サイズは菊判（一五〇㎜×二二〇㎜）、のちにＡ５判（一四八㎜×二一〇㎜）。ページ数は時期によってかなり幅があり、二〇頁以下の時もあれば六〇頁近い時もあるが、いずれにせよそれほど大部の雑誌ではない。一九三四年一月に中村古峡診療所内で創刊された本誌は、終戦前後の一時休刊を挟みつつ、一九四八年九月（一四（九））まで刊行された。資料群の調査の過程で、五六冊（複本を除く）が発見されている

ものの、欠号も少なくない。さらには、編集の遅れのため一冊に「六・七・八号」のように複数の号数が付けられたり、休刊扱いにして号を飛ばしたりするケースも多く、総刊行号数を確定することは困難である。

『黎明』の名は、一部の研究者には中原中也の詩「道修山夜曲」（図表1）の初出誌として記憶されているかもしれない[2]。だが、資料の



道修山夜曲

東京　中原中也

星の降るよな夜でした
松の林のその中に、
僕は蹲んでをりました。

星の明りに照らされて
折しも通るあの汽車は、
今夜何處までゆくのやら。

松には今夜風もなく
土はジツトリ濕つてる。
遠く近くの笹の葉も
しづもりかへつてゐるばかり。

星の降るよな夜でした、
松の林のその中に
僕は蹲んでをりました。

――一九三七、二、二――

図表１：中原中也「道修山夜曲」（『黎明』４（４）157頁）

欠落の多さに加え、前期のうちはごく一部にしか流通していなかった会員制雑誌であったことも災いしてか、これまで本誌自体が総体的に論じられることはなかった。不明な点も少なくない『黎明』ではあるが、本論では残された資料を最大限用いて、その大まかな輪郭を描き出すことを試みたい。

またその際には、本誌が古峡によって執筆された記事以上に、療養所内外の読者たちの体験談や相談などの投稿によって支えられていた点に着目し、雑誌に参与する様々な人々（古峡・編集担当者・療養者・「相談」投書者など）の間で作動する言説のエコノミーについても検討していく。

ここでいうエコノミーとは、ミシェル・フーコーが『監獄の誕生』（一九七五）以降に展開した権力論のなかで、例えば「処罰権力のエコノミー」「快楽のエコノミー」といった言い回しによって、しばしば用いた概念を踏襲している。多様な解釈が可能な言葉であり、文脈によって「産出・配分構造」「生産・管理構造」などと訳されてきたが、重視したいのは、これが諸権力の「排除のような否定的・消極的な効果ではなく、選別や組み替え・配置換えのような肯定的・積極的な効果」や、それによって「雑多なものからいくつかがより分けられて、思いもよらぬ異質のものと結びついたり、思いがけない別の場所に移されたりする」運動を捉えようとする概念であった点である[3]。

のちに触れるように、『黎明』にも誌上の言説をコントロールするような規範や権力が種々働いている様子がうかがわれるが、本論では

それを一方的な圧力とみなし、「否定的・消極的」に捉えて終わりとはしない。それによって生じる「選別や組み替え・配置換え」あるいは「思いもよらぬ」結び付きに目を凝らすことで、『黎明』という近代日本の精神医療と雑誌文化の重なり合う場で何か生起していたのかを明らかにしてみたい。

なお、本誌にはその特性上、中村古峡診療所・療養所の患者たちや相談依頼者たちの実名が頻繁に登場する。個人情報に配慮し、本論での引用に際しては、患者・相談依頼者とみられる執筆者については著者名を省略し、タイトルや記事文のなかに個人名が挙げられている場合には匿名化を行なっている。

## 一　『黎明』の時期区分と前期の特徴

『黎明』は、戦況悪化と敗戦後の混乱によって休刊を余儀なくされた二一ヶ月の期間（一九四五・四－一九四六・一二）を分断線として、前期（一（一）－一二（三））と後期（一三（一）－一四（九））とに分けることができる（参考：図表2）。

創刊号の巻頭に置かれた「黎明修養会設立趣意書」には、本誌創刊の趣旨が次のように掲げられている。

御殿山の待合室に、千葉寺の寮舎に、互ひに語り合ひ、助け合ひ、導き合つたことは終生忘れられない思ひ出である。されど一度西に東に袂を分つて見れば、折に触れて憶ひ出しはするものの、筆を手にするが億劫で、つひ疎遠になりがちなものである。しかしそれで宜いだらうか。［中略］かうした不満を充す為には、其処に何等かの聯絡機関を必要とする。此度私達が発起人となつて、黎明修養会を設立し、雑誌『黎明』の発刊を企図したのも、動機はまさに其処にあつたのである。何の難しい理屈はない。お互ひの親睦と修養とが『黎明』の担つた唯一の使命である。（一（一）表紙裏面）

『黎明』は、中村古峡診療所・療養所の患者たちが自主的に設立した「黎明修養会」によって、退寮者も含めた療養者同士のつながりを維持・発展させるための雑誌として始められたものであった。役職一覧では古峡は「顧問」とされており、雑誌の編集は服部清五郎（元は中村家書生で、『変態心理』記者。当時は療養所の作業部主任）が中心となって担当していたようだ。

**図表２：『黎明』の変遷概略**

| 発行日 | 巻号 | 価格 | 編集者 | 発行者 | 印刷者 | 印刷所 | 発行所 | 発行所住所 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1934.1.31 | 1巻1号 | 会費年額2円40銭 ※1 | 服部清五郎 | 西郷保平 | 石野初太郎 | 黎明修養会印刷部 | 黎明修養会 | 東京市品川区北品川四丁目七一八中村古峡診療所内 |
| 1934.3.31 | 1巻3号 | | | | | | | |
| 1935.12.30 | 2巻9・10号 | | 塚原肅 ※2 | | | | | |
| 1936.10.30 | 3巻10号 | | | | 亘初太郎 | | | |
| 1937.4.1 | 4巻4号 | ［1部］20銭 | 三宅守一 ※3 | | | | | |
| 1940.2.1 | 7巻2号 | | 豊村與 | | | 千葉印刷株式会社 | | 千葉市千葉寺町一八八番地中村古峡療養所内 |
| 1942.4.1 | 9巻4号 | | 高原正也 | | 加藤至徳 | | | |
| 1943.9.1 | 10巻8・9号 | | | | 亘初太郎 | 千葉刑務所 | | |
| 1947.1.1 | 13巻1号 ※4 | 1部3円、送料20銭<br>半年分19円<br>一年分37円 | 中村蕭 | 中村蕭 | | | | |
| 1947.5.1 | 13巻4・5号 | 1部3円、送料1円20銭<br>半年分25円<br>一年分50円 ※5 | | | | | | |
| 1947.7.1 | 13巻7号 | 1部5円、送料1円20銭<br>半年分38円<br>一年分75円 ※6 | | | | | | |
| 1947.9.1 | 13巻9号 | 1部5円、送料50銭<br>半年分33円<br>一年分66円 ※7 | | | | | | |
| 1948.1.1 | 14巻1号 ※8 | | | | | | | |
| 1948.6.1 | 14巻6号 | 1部10円、送料50銭<br>半年分63円<br>一年分125円 ※9 | | | | | | |
| 1948.8.1 | 14巻8号 | 1部10円、送料2円<br>半年分72円<br>一年分144円 ※10 | | | | | | |

※1　価格は「黎明修養会設立趣意書」より。
※2　当号に編集者変更の挨拶あり。
※3　当号に編集者変更の告知あり。
※4　12巻3号（1945.3）を最後に一時休刊していたが、今号から復活。会員組織制を改廃し、「公衆雑誌」へ。前編集者の高原も編集に残留。「精神衛生相談室」一件10円で対応。
※5　郵便料金値上げのため、定期購読料値上げ。
※6　物価上昇のため雑誌代金値上げ。
※7　第三種郵便物再認可による送料値下げ。
※8　「精神衛生相談室」一件20円に値上げ。
※9　物価上昇のため雑誌代金値上げ。
※10　郵便料金値上げのため、定期購読料値上げ。

＊中村古峡資料群内に現存する『黎明』全56冊（1934.1-1948.9）を参照し、竹内作成。

では、誌面にはどのような記事が掲載されていたのだろうか。前期本誌の主要な欄を挙げておこう。

・「講話」
　…古峡による精神医学に関わる談話や評論などを掲載。
・「感想」
　…療養日誌の一部や、退寮後の療養回顧録などを掲載。
・「文苑」
　…短歌、俳句が中心。随想や小説が掲載されることもある。
・「通信」
　…編集部や古峡宛に届いた手紙の文面を紹介。
・「道修山日記抄」
　…院長動向や作業内容など、診療所の毎日の出来事を箇条書きでごく簡単に記載。業務日誌の抄録とみられる。
・「会費領収報告」
　…会費振込者の氏名掲示。
・「千葉寺便り」「編輯室だより」
　…編集後記。編集者が担当。

これらに加えて一時期ではあるが、医師であった古峡の息子たちが、それぞれの専門領域の話題を叙述する記事（中村哲「生理の瑣談／生理瑣談」七（一二）－一一（一二）？[4]、中村寛「神経質に就いて」九（一一）、

同「ヒステリー状態」一〇（八・九）－（一〇）が断続的に連載されている。また、不定期ではあるが、療養所の行事を参加者たちが報告する「興趣」欄や、塚原肅「千葉県下に於ける犯罪統計」（二（三・四・五））のような療養所スタッフによる記事も確認することができる。

療養所の活動に関わる情報を軸としながらも、雑多な内容が展開されていた前期『黎明』だったが、大きく分ければ三つの面があったと考えられる。

まず一つ目が《会員同士の親睦・連絡機関としての一面》である。

『黎明』何時も面白く拝見して居ります。昨夏御入寮の皆様は、其の後どう遊ばしましたかと常に気には懸りながらも、皆様の御通信が誌上に見えませんので淋しく存じて居ります。（「育児を日課として」一（八）一七九頁）

先日は「黎明」をお送り下され、誠に有難く御礼申上げます。先生の御講話は、何時もあの思ひ出深き竹林寮のお室で伺ふやうな気持で読ませて頂いて居ります。尚皆様の御消息、日記、殊に八年夏組の方のお名前を拝見するさへ懐かしき限りであります。（「通信」二（六・七・八）一四一頁）

会員たちからの通信の多くは、このようなたわいもない挨拶にすぎないが、彼らが寮生活へのノスタルジアを土台とし、療養所のコミュニティとの心的つながりを維持している様子がうかがわれよう。「お名前を拝見するさへ懐かしき限り」とあるように、投書者もそれを読む読者も、通信の内容そのものは、さほど重視していない。自分の名前が載ること、あるいは同期の療養者や古峡の名前を確認すること自体に意味があったのだろう。誌上に通信欄を開き続けた前期『黎明』は、会員間の地理的・時間的な隔たりを越える、安定した〈ハブ〉として機能していたのである。

そして二つ目の面は、《中村古峡診療所・療養所の〈紀要〉としての一面》である。

前期本誌には、古峡の評論が「講話」欄を中心に確認できるだけでも三七本掲載されている。はじめのうちは、「不眠に悩む人々に」（一（五））、「新入寮者諸君に」（二（三・四・五）－（六・七・八））など、療養所で開催された講話会での話に基づいたとみられる、療養者に向けた実践的な知識を伝達する評論も多い。それが前期の後半ともなると、次第に「精神分裂病に就いて」（九（四）－（一一））、「無意識論」（一〇（八・九）？－一一（一二）？）といった、精神医学の学術論文を思わせるタイプの評論に切り替わっていくようになる。七巻途中からは古峡の息子たちの専門性の高い文章も頻繁に掲載されるようになっており、前期後半の古峡評論の変化はそうした流れを引き継いだものとも考えられよう[5]。

このように『黎明』に掲載される評論は、巻号を重ねるにしたがって療養者たちを啓蒙するという方向性が弱まり、専門的なものへと移

行していく。結果として、前期本誌は研究機関の研究成果を定期的に発表する雑誌、いわゆる〈紀要〉のような役割をも担うようになっていたのである。

「黎明修養会設立趣意書」では「お互ひの親睦と修養とが『黎明』の担つた唯一の使命」と述べられていたが、前期『黎明』の一つ目の面が会員たちの「親睦」を、二つ目の面が「修養」を支えていたといえるかもしれない。ただし、会員たちの「修養」と最も強く結びついていたのは、三つ目の面、《古峡療法への〈信仰〉を共有する場としての一面》であった。

## 二　全治体験録を書き綴るということ
## ― 古峡療法への〈信仰〉を共有する場

### 類型化した物語としての全治体験録

三つ目の面が分かりやすい形で見てとれるのは、『黎明』のメインコンテンツのひとつだった全治体験録である。療養所で書かれた療養日誌の抄録を主に掲載していた「感想」欄が「発病より全治まで」と改題され、基本的には療養者が退寮前後に書いた全治体験録を掲載する形式に変更されたのは、一九三六年（三（一〇）？）からだった。

以後の議論とも関わるため、ここで簡単に中村古峡療養所で実施されていた独自の治療システムについて触れておきたい[6]。療養所では、八週間を治療期間の基本とし、第一週目「絶対安静期」、第二週目「準備作業期」（軽度の作業訓練）、第三～六週目「正規作業期」（本格的作業訓練）、第七・八週目「自治生活期」といった段階が設けられていた[7]。実施にあたっては、症状が安定するまでは3寮と呼ばれる隔離病棟に入り、症状が安定したのちに開放病棟にあたる1寮または2寮へと移動する制度となっていたようだ。

療養所の治療において作業訓練と並んで重視されたのが、療養日誌である。この日誌は自由意志で書かれる私的な日記ではなく、治療の一環として導入されたもので、記入が療養生活の重要な日課とされていた。入院患者は毎晩九時までに各自の日誌（市販の雑記帳、のちに項目ごとの欄が設定されたプリントに変更）を記入し就寝。回収された日誌は、古峡によって検閲・朱記がなされ、翌日に返却。最終的には患者ごとに取りまとめて、検診録とともに病院で保管された。

古峡療法の療養者が自らの治療経験を綴った「体験録」は、古峡の著書『神経衰弱と強迫観念の全治者体験録』（主婦之友社　一九三三）などでも確認できる。この段階では療養者が書いた療養日誌の抄録が「体験録」とされているのだが、『黎明』の「発病より全治まで」欄には、療養日誌そのものではなく、全治退寮者が現在の視点から自らの回復の道程を振り返る形式で綴った文章が掲載されている。

以前から療養所では、全治退寮者の送別会も兼ねた談話会で、古峡または退寮者本人が回復に至った経緯を紹介するのが恒例となっていたが[8]、次第に全治体験録という文章のかたちで提出することが慣習化されていったものと推察される。それは「先生の云はれる如く、千

葉寺の生活に於ける一つの卒業論文」（［通信］一一（三）七六頁）となっていたのである。

確認できるだけでも、前期『黎明』には六〇本を超える全治体験録が掲載されている。一本一本がそれなりの長さを持った文章であり、全文を紹介することは叶わないが、そのうちから一つ、「赤面恐怖の開悟」の梗概を紹介しておこう。

自分は一六歳の頃から「頬が赤くて子供つぽい」ことに劣等感を抱いていたが、一八歳の頃には赤面恐怖症、さらに翌年には会食恐怖症を発症してしまった。「中村先生の著作」を手に入れたおかげで、学校はなんとか卒業することができたが、このままではとても進学できないと考え、ついに療養所に入寮することになった。

作業訓練等を経て回復したと過信した自分は一度退寮したものの、すぐに再発。ふたたび入寮することになる。今度はより主体的に治療に取り組み、赤面してもかまわず会食に挑んだり、古峡の「全治者体験録」などを精読したりといった努力を重ねた。結果、「次ぎ〳〵に恐怖に飛込んで解脱する精神力」を身につけることができ、自信を持って退寮した次第である。長い間の中村先生のご指導に深い感謝を捧げたい。（九（四）六一－六五頁を梗概化）

この体験録の書き手は男子学生だったが、「発病より全治まで」欄には性別・年齢・職業・症状を異にする様々な書き手が確認できる。それゆえ一見すると多様な内容が書かれているようにみえるこれら体験録だが、分析を進めていくと興味深い事実に気付かされる。そのほとんどが次のような一定の語りの類型（プロット）のなかに収まってしまっているのだ。

1、自身の性質も含む、神経症発症に至るまでの経緯の説明
2、発症後の苦悩、迷走
3、古峡を著作等で知り、診療所へ入寮
（4、入寮後の作業療法への不安、不信。作業の挫折）
5、作業の効果を実感、症状からの回復
6、謝辞

当然、全ての体験録がこれらの要素を完備しているわけではない。文章量の少ない体験録などでは、特に4番目の要素などは省略されがちである。それでも全体の傾向としては、このプロットに従っているとみてよい。では、なぜ多くの体験録は、類型化した物語となってしまったのだろうか。

## 〈読む／書く〉サイクル

理由としてまず挙げられるのは、体験録の書き手のほとんどが、か

つてはその読み手であったということだ。編集後記をみると「本誌本号に採録したる全治体験録三篇は揃ひも揃つて見事なる出来栄えであ」り、「他の療養者の好模範たるを失わぬ。特に新入寮者諸君の精読を御勧めしたい」（一一（一一）二七頁）と、それを「精読」し「模範」とすることが推奨されていた。

実際、同時期の体験録に書かれた「数々の治癒された先輩の方々が述べられた如く、自分も当寮の規則を守り、只々作業に専心する事が症状の治癒を必ず結果すると思います」（「苦脱新生」一一（一二）二八三頁）といった述懐からは、書き手が「数々の治癒された先輩の方々」と表現できるほど、多数の回復事例の情報に触れていたことがうかがわれる。そのうちには、対面のコミュニケーションのみならず、先輩たちの残した体験録の一群を「精読」することも含まれていたであろう。「模範」を求めて体験録を真摯に読み込んでいった読み手たちが、今度は書き手に転じていくのである。先行するテクストと類似していったとしても不思議はないだろう。

ただし、全治体験録の書き手たちが〈読む人々〉でもあったことの影響は、単に書き方のレベルにとどまるものではない。彼らのものの捉え方もまた、読むことを通じて一定の方向に整えられていく。例えばそれは、「性格異常は、天から与へられた一の試練である。只管仕事に精出すことの重大さを教へて呉れる」（「私の療養日誌」七（二）五一頁）や「神経質も本態を把握しますと、却つて有ることが新しき性格の創造、拡張を実現する為めに必要です」（「冬来りなば」九（五）八一頁）といった記述にみられるような、《神経質への感謝・肯定》といったかたちで表れてくる。

「神経質」とは、内向的素質が過剰に働いて過敏となることで、杞憂観念や劣等感に支配されてしまっている状態、またはそのような傾向を帯びた気質そのものを指す用語である（中村古峡『神経衰弱はどうすれば全治するか』主婦之友社　一九三〇）。今の自分の苦しみの直接的な原因となっている神経質に感謝して肯定しようというのはいささか突飛にもみえるのだが、そうした考え方が療養者たちに共有されていたのは、古峡の「神経質療法の一般法則」の教えがあったからであろう。彼の著書（中村、一九三〇）では、「第一則　病的な完全欲を去れ」から始まる一二の規則が提示されているが、その第一二則として挙げられているのが「感謝の心を以て生活せよ」である。

> すべての人間の素質の中で、神経質ほど恵まれてゐる素質は、他にないのであります。たゞこれが、本人の心の持方一つによつて、大なる仕事の柱石ともなれば、反対に、一身を滅ぼす獅子身中の虫ともなるのであります。だから、神経質の人々は、常に自分自身の気質に感謝し、自重自愛して、その恵まれたる素質の長所を発揮するやうに心掛けねばなりません。（同前　三四一－三四二頁）

体験録プロットの３《古峡を著作等で知り、診療所へ入寮》に示されているように、書き手たちの多くが古峡の著書や『主婦之友』での

掲載記事などの読者でもあった。彼らはその読書から「神経質ほど恵まれてゐる素質は、他にない」こと、「その恵まれたる素質の長所を発揮するやうに心掛け」るべきことを学んでいく。

重要なのはそのような思想が、神経質とは「新しき性格の創造、拡張を実現する為めに必要」なものであるといった、療養者個人の言葉に置き換えられながらも、体験録へと書き残されていくということだ。それらは後輩療養者たちに「模範」として「精読」されることで、次の代へと引き継がれていくことになるだろう。もちろん、療養者たちには療養所の講話会など、古峡から直接口頭で思想を伝えられる機会も設けられていた。だがそのような機会に加えて、彼らの生活はすでに、古峡の著作や療養者たちの体験録といった古峡療法に由来する思想をはらんだ多くのテクストに取り囲まれており、それを〈読む／書く〉サイクルのなかに自ずと置かれていたのである。

## 書き綴ることを通じた自己の〈調律〉

先行する諸テクストが示す枠組みを、繰り返し参照しつつ自身の経験を書き綴っていくこと。それは書き手となる療養者たちとって、どのような効果や意味があったのだろうか。この問題を考える手がかりとして、『神経衰弱と強迫観念の全治者体験録』に掲載された、ある大学生の療養日誌の一節をみておきたい。

私は或るちよつとした悟りごとでもすると、日記を書いてゐるうちに、そのことを幾倍にも拡大して書いてしまふ。又私には、そうして書いてゐるうちに、よしそれが本当の自分の心よりも相当隔りがあるやうに思へることでも、さう書いてしまふと、少くとも翌日かその又翌日には、自ら何だかそんな気がして来るのだ。（評に曰く［＝日誌に書き込まれた古峡の朱記であることを意味する］、然り、それが又自己を向上発展させるための、最もよき自己暗示法でもあるのだ。）［中略］私の日記は、自分の本当の姿とはまだ少しの隔りはあると思ふ。無理にそんな隔りを作つて、お賞めの言葉を貰はうとするのではないが、私はとにかく幾分無理を推しても、さうした不快な心を制する言葉を書列ねるうちに、やがて心が鎮まつて来るのだ。（「八年間の正視恐怖症、不眠症其他を五週間の訓練で全治した体験記」（中村、一九三三 一七九頁 傍点本文）

ここには、日誌に記した理想的な自己像と実際の自分との「隔り」が、「言葉を書列ねるうちに」乗り越えられていくという経験が語られている。それが奏功したのか、彼は日誌を日々書き継いでいくなかで、次第に神経質ゆえの苦しみさえも、「普通人以上の修養を成し得る契機を与えてくれた「神の試練と思つて感謝」するようにまでなっていく。この記述に対して古峡は、「神経質ほど恵まれてゐる気質は他にない」と同意を示し、「拙著『神経衰弱はどうすれば全治するか』第八章、一般法則第一二則［＝本論既出の「感謝の心を以て生活せよ」］参照のこと」と朱記している（同前 一八九－一九〇頁）。大学生にとって

こうした古峡の言葉は、自分が歩みつつある道が誤りではないこと、そしてこれから進むべき方向を教えてくれる、かけがえのないものであったと考えられる。

療養日誌を舞台として大学生が行っていたのは、いうなれば書き綴ることを通じた自己の〈調律（チューニング）〉であったといえるだろう。古峡という依拠すべき存在から発せられる言葉＝〈基準音〉を参照しながら自らを書き綴り、少しずつ目標とする自己イメージへと合わせていったのである。

先に確認してきたいくつかの文面、例えば《神経質への感謝・肯定》の内面化に至った療養者たちの姿からは、『黎明』に全治体験録を書き綴ることにおいても、同じく自己の〈調律〉と呼べるような営みが行われていたことがうかがわれる。ただし、こちらは療養日誌における大学生の営みよりも、いくぶんシンプルである。大学生は自身の日誌に朱記される古峡の言葉に反応しながら、日々新たに自分の言葉を紡いでいかなければならなかった。いわば〈対話〉のやり取りのなかで、その都度、自己を〈調律〉していったのである。対して、全治体験録の書き手が行うのは、基本的には先行する体験録がすでに提示してくれているプロットに、自らの経験を当てはめていくというパターン化された営みであったといえる。

彼らも療養生活中には日誌を必ず書かされており、大学生と同じような試行錯誤をすでに経てきたのかもしれない。だが、完治体験録を書く際には、そのような個別の試行錯誤は既存のプロットに当てはまる範囲に整序され、〈苦悶を乗り越え「完治」へと至った私〉というわかりやすい物語のなかに綺麗に収まってしまうことになる。

それは回復した自分という新たなアイデンティティを、物語を通じて確立する技法、または儀式ともいえ、治療法のひとつとしてみるならば一概に否定すべきものでもない。しかし、それが時間を経て制度化されていくに従って、次第に体験録を書くこと自体がある種の規範として機能するものになっていったことには注意しなければならない。

## 糾弾される〈異端〉

一九四三年九月の『黎明』（一〇（八・九））の編集後記には、近頃の療養所の雰囲気に苦言を呈する言葉が並んでいる。

> 先輩も後輩も一様にだれ気味で、日々の作業日誌や感想を真面目に書いてゐるものは、ホンの二三名に過ぎず、況して退寮の際「体験録」を書きのこして行く殊勝な心掛のものは只の一人もなく、最近の講話会に於ても院長先生をして「今年夏季の如き寮生の不成績は当療養所開設以来最初のことなり」との嘆声を発せしめたとは誠に心細い。（二五三頁）

『黎明』の「発病より全治まで」欄が開設されてから七年が経ち、全治体験録も安定して誌面に掲載されていたのだが、体験録を書き残

していくという療養所のシステムは、時に機能不全を起こしていたようである。見逃せないのは、そのような状態に対して、編集者から怒りすら感じられる強い非難がなされているという点だ。

実はこの前年（一九四二）にも、『黎明』誌上で感情的ともいえる非難が巻き起こった事件が勃発している。きっかけは「T」という退寮者が執筆した体験録「逆流に棹して」（九（六））が掲載されたことだった。残念ながら当該号が古峡資料群のなかに残されていないため、「T」が具体的にどう書いているのかは確認できない。だが、翌号に療養者三名の連名で投稿された批判文「T君の体験記を読みて」（九（七））によって、ポイントとなりそうな内容はおおよそ知ることができる。

批判文では、「君は規律云々と書いて居るが、各室に掲げられた戒を破つて雑談を最も多くしてゐたものは君自身ではなかつたか」といい、さらに「君は先輩が方向を教へてくれなかつたと非難して居るが、一体君は誰を頼つて入寮して来たのか。患者の指導を受けに来たのか。又君は、他の寮友が毎晩熱心に日誌を書いて院長の指導を仰いて居るに拘はらず、君は一週に一度でも日誌の感想欄を書いて出したことがあるか」と、難詰している（一二三頁）。

最後、この批判文は「君は此の「黎明」なる雑誌は、北は樺太、南は台湾、西は朝鮮満州支那に渡つて普ねく[ママ]黎明修養会会員諸君に配布されることを既に御承知の事と思ふ。この公然と社会に発表さるゝ貴き誌上に、かくも誇張した悪宣伝に近き一文を寄せて、省みて自ら恥かしいとは思はないか。願はくは一日も早く共感・感謝・謙譲・平和の真の全治の心境に到達し、須く其の非を悟られんことを切に念願するものである」（同頁）と閉じられるが、以上の引用箇所には、療養者たちが「T」を許せなかった理由がよく示されている。

それは大きく三つに分けられるだろう。一つ目は、「T」の主張と療養者たちが知る彼の実態とが、明らかに乖離していたこと。二つ目は、「T」が古峡療法が重視する療養日誌に、真剣に取り組んでいなかったこと。そして三つ目が、会員（現・元療養者たち）が心の拠り所とする療養所のイメージを毀損するような言説を、よりによって『黎明』という彼らの共同体の基盤を用いて流布させたことである。

療養者たちの非難が正鵠を射ているのか、あるいは「T」の〈告発〉が事実なのか、資料に限りのある現代の我々にはそれを審判する術はない。一方で、療養者たちの批判文のうちにも、先に挙げた編集者の非難と同様の感情的な反発が、色濃く現れているのは間違いないだろう。そこには共通して、規範から逸脱する者たちを否定・排除したいという、強い欲望が滲み出ているようにみえる。

ここまでの議論を踏まえるならば、『黎明』における全治体験録が持ち得た、単なる治療技法にとどまらない、もうひとつの意義がはっきりとみえてくる。

全治体験録とは、古峡療法の成功例であり、物語として類型化されたプロットに沿って書き綴られたものであった。当然ながら、そこには新たな発見や理論的展開は、ほぼ見受けられない。反復されるのみ

で進歩が欠如しているともいえるのだが、考えようによっては、そのようなものはあったところで困るものだったのかもしれない。

なぜなら、体験録で大切なのは、先輩たちや自身が行ってきた古峡療法の正しさを証明することであり、同時にそれに救われたということを書き綴ることで、書き手の「全治」を完了させることだったからだ。ここに垣間見えるのは、体験録の「おかげ話（霊験譚）」的側面である。「神への熱心な信仰によって医者からも見放された難病が完治した」といった「おかげ話」においては、奇跡的出来事を語ることで、神の力の証明と同時に、その神に対する自らの信心が正しいことの証明がパフォーマティヴなかたちで遂行されていく。もしそこに〈新たな発見や理論的展開〉などがあったとすれば、かえって絶対的であるはずのこれまでの〈教え〉そのものへの疑いを生じさせかねない危うさがはらまれてしまうだろう。

こうした視点からみるならば、前期『黎明』でメインコンテンツとしての役割を担った「発病より全治まで」欄が、同型の体験録を読む／書き綴ることを通じ、繰り返し古峡療法に対する〈信仰〉を確認し合う場でもあったことがはっきりとしてくる。会員たちは、『黎明』という場を活用することで、古峡個人の直接的な指導がなくとも、自律的に〈信仰〉を高め合うシステムを構築していたのである。だからこそ、その〈信仰〉のシステムを侵犯しかねない者、例えば体験録を書かない者や療養所批判等の既成の型から外れた記述を行う者は、〈異端〉として排除されなければならなかったのだ。

## 三　後期『黎明』― 模索される共同体の再構築

アジア太平洋戦争末期から敗戦直後の混乱を経て、『黎明』の刊行が再開されたのは一九四七年一月（一三（一））であった。再開号の冒頭に置かれた古峡による「巻頭言」では、次のような宣言が行われている。

> ［軍部は］「戦争は進歩の母」などと独りよがりの譫語を吐いて、国民の口を塞ぎ、耳を覆ひ、目を盲にし、自己と少しでも歩調を異にする者あらば、直ちに国賊非国民呼はりを敢てし、勝手気儘の横暴を逞うした。［中略］彼等は自己の権勢欲に眼眩める、最も無軌道没常識な精神異常者であつた。［中略］前日の愚を再び繰り返したりしないやう、国民各自が互に相戒め、相助け合ひ、且つは精神衛生を能く守つて、精神異常者の言動に捲込まれないやう、注意に注意をして行かなければならぬ。蓋し今日ほど精神衛生の重要性が痛感せらるゝ時はないであらう。これ本誌が爰に従来の狭き会員組織制を改め、面目を一新して全国民に公開し、共に倶に健全精神を常持して、民主日本、文化日本の建設に寄与せんことを大いに期する所以である。（一頁）

戦中には『黎明』誌上でも、「吾等一億国民はこの大戦果［＝当初、日本軍勝利と伝えられていたレイテ沖海戦］に酔ふことなく、愈々勇往邁

進職域奉公の誠を致し、大東亜戦争最後の決戦に勝ち抜かねばならない」（「編集室だより」一一（一一）二七二頁）といった戦争協力を鼓舞する言葉が踊っていたのだが、それを忘却したかのような強い口調の軍部批判である。また「巻頭言」では、今号からは「従来の狭き会員組織制を改め、面目を一新して全国民に公開」とあるように、一般販売される「公衆雑誌」とすることがうたわれ、本誌は以後、古峡を名実ともに責任者として運営が進められていくことになる。

この転換は、主要な欄にどのような変化をもたらしたのだろうか。まとめれば左の通りである。

【前期からの流れを汲む欄】

・「講話」
　…欄名は消えるが、評論記事は継続して掲載。
・「発病より全治まで」
　…「全治者体験録」に改題。
・「通信」
　…「通信一束」に改題。不定期掲載となり、分量は一頁の半分程度に縮小。
・「千葉寺便り」
　…前期から引き続き、編集スタッフの高原正也が担当。
・その他
　…不定期でスタッフのエッセイなどが掲載。

【後期から新たに開始された欄】

・相談応答欄（「精神衛生相談室」一三（一）～、「青年と性的神経衰弱」一三（一一）～、「対人恐怖、赤面恐怖の全治法」一四（九））
　…相談料一〇円（一四（一）からは二〇円）で一般読者からの相談書簡を受け付ける。そのうちの一部を誌面に掲載。「青年と性的神経衰弱」は当初、古峡の評論を掲載していたが、「愛読者が非常に多数と見えて、続々質問の書信が山積して居」る状況を受けて（「千葉寺だより」一三（一一）一五二頁）、第四回からは性的神経衰弱に関連する質問とそれへの回答を専門に扱う欄に切り替わる。なお、「精神衛生相談室」も並行して継続。

前期からの流れを汲む欄も少なからず変更を受けており、前期『黎明』の三つの面のうち、一つ目の《会員同士の親睦・連絡機関としての一面》は弱まり、二つ目の《中村古峡診療所・療養所の〈紀要〉としての一面》は継続されるが、一般読者に向けた啓蒙的な方向性が強くなったといえるだろう。

では、残された三つ目の《古峡療法への〈信仰〉を共有する場としての一面》は、どうだろうか。後期から新たに開設された「精神衛生相談室」をみてみると、古峡と相談者との次のようなやり取りが目にとまる。

小生が本誌第一号から第七号に亘り連載し来つた「神経質の療法」並びに拙著「神経衰弱の正体」第二篇第四章に述べておいた「神経質の療法」を繰返し熟読せられて、その性格改造に努力邁進せられんことを祈ります。（「この心の悩みを如何にすべきか」一三（九）一一五頁）

K・M・君よ、先づ気を落ち着けて、もう一度ゆつくりと余の「青年と性的神経衰弱」の一文を読め。君の悩んでゐる幾多の症状や煩悶は、決して君の過去の自涜の結果ではなくして、全部が君の神経質の産物であることが理解されるでせう。（「過去の自涜行為を慚ぢて懊悩」一三（一二）一六九頁）

一見してわかるように、古峡の回答には自著を参照するよう指示する記述が頻繁にあらわれてくる。ただ、相談者たちの関連テクストを読む習慣の欠如には、この時期特有の事情も関わっていたと考えられる。一九四五年五月に古峡の品川の邸宅と診療所が空襲を受けて全焼し、在庫があらかた焼失してしまったことで、彼の著書の希少化が進んでいたのである。『神経衰弱と強迫観念の全治者体験録』などは、古書店で「二百円以上といふ篦棒な値段」（一四（三）三六頁）となっていたらしい。古峡の著作や前期『黎明』を通じて蓄積されてきた体験録だったが、療養所外の読者にはなかなか触れ難いものになってしまっていたのである。加えて、そこに今回の「公衆雑誌」化による外部の新規読者の大幅な増加が重なった結果、先ほどのような古峡とのやり取りが惹起されるに至ったというわけだ。前期『黎明』でみられたような、先行テクストを活用して〈調律〉を行っていくシステムが、そもそも成立し難い状況が生まれていたのである。

古峡も、ただ手をこまねいていたわけではない。『黎明』再開直後から、絶版状態だった旧著『神経衰弱はどうすれば全治するか』に載せられていた〈神経質療法の一般法則〉を連載し[9]、新規読者への啓蒙を意識した誌面作りをおこなっている（一三（一）-（七））。また、神経衰弱研究の新基軸を大胆に打ち出したとする『神経衰弱の正体』（羽田書店　一九四七）や、一〇名の「強迫観念全治者体験録」を所収した『強迫観念の全治法』（人文書院　一九四八）といった新著を続けて刊行しており[10]、積極的に自らの理論と療法への理解を広めていこうとする姿勢もうかがわれる。

果たして古峡の努力は報われたのだろうか。『黎明』再開後、一年半を経過した時点の相談応答欄「青年と性的神経衰弱」（一四（六））をみてみよう。

あなたもまだ本誌は一度も見て居られないやうですね。あなたの悩んで居られる性器短小や早漏の問題は、すでに本誌の「青年と性的神経衰弱」の中で、詳しく説明しておきました。（八七頁）

あなたは新聞広告を見ただけで、まだ本誌の一冊も手にすることなく、慌てふためいてこの長文の手紙を寄せられました。成程「溺るゝ者は藁をも掴む思ひ」で焦り藻掻いて居られる心事はお気の毒にも察せられますが、さて二十年間も悩み悩んだ揚句、今更また藁を掴んでどう為さらうとするお考へですか。（八九―九〇頁）

当号の本欄回答は全て、質問者が既刊の本誌や古峡の著作を読まないまま投稿してきたことへの苦情から始まる。その書き振りからは、言葉遣いこそ丁寧だが、明らかに苛立っていることが伝わってくるだろう。どうやら古峡は、後期『黎明』誌上においては、以前の自律的な〈信仰〉共同体を再構築することに苦戦し続けたようである。

## 四　〈共鳴〉する〈わたし〉の個別性

このように後期『黎明』では、〈読まない人々〉からの相談に、なんとか読んで欲しい古峡からの苦言が返されるというパターンが通例となっていた。しかし相談欄には、時にそうした定型的な相談とは質を異にする相談があらわれることがある。

一例として、一九四八年三月号の「精神衛生相談室」欄（一四（三））に掲載された、ある女性の質問をみてみたい。彼女は自らの症状に苦しむなかで「『神経衰弱と強迫観念の全治者体験録』の尊い御著ある事を知り、早速求めて拝読させて頂き」、「特に第十二章『犯罪恐怖殺人恐怖記録症其の他諸種強迫観念の全治者体験録』の所が、最も私の心に合つてる」ことを知ったのだという（「犯罪恐怖症に悩まされて」三五頁）。ここからは、彼女が当時手に入りにくくなっていた古峡の著書を買い求め、かつ自分が具体的にどの事例に当てはまるか判断できるほどに熟読していたことがよくわかる。この理想的な相談者に対する古峡の回答は、「あなたは、あの書の第十二章に収録されてゐるI・T・女史と同一の症状であるならば、あの体験録に指示されてある通りの心掛を守つて、どうぞ一日も早く全治してください」（三六頁）という、〈読まない人々〉たちへの対応とは対極的な、物腰柔らかなものであった。

〈読む人々〉に属すると思しき相談者からの相談は、他にも散見される。同号の「青年と性的神経衰弱」欄に目を移せば、次のような一文が確認できる。

> 早速お送り下さいました書物、『神経衰弱の正体』と、月刊雑誌『黎明』全部を精読致しました。私と同じ悩みを持つた多くの先輩の方々が全治した体験録を見まして、私のこの難病も必ず根治できると云ふ光明を掴むことができました。それでも神経質の全治に関しては、未だ半信半疑であり、分からないところがありますので、再び先生の教へを受けやうと思ひまして、筆をとりました。（「陰萎恐怖症に悩みて」四一―四二頁）

この男性相談者は「私の現在の心の持方は、先生の著書「神経衰弱はどうすれば全治するか」の中の神経質療法の一般法則の中の「感情心理の自然法則に従へ」を厳守してをります」（四二頁）とも述べており、先の女性相談者同様、先行テクストから学ぶ姿勢を身につけた理想的な相談者であったといえるだろう。

だが、このような理想的な相談者からの質問には、ある矛盾がつきまとっているのではないか。先行テクストを参照して自分の症状がどのようなものであるのかを理解できているのであれば、それにどう対処すべきなのかの答えもすでに先行テクストのなかに示されているはずなのだ。彼らに対する古峡の回答が「あの体験録に指示されてある通りの心掛を守つて」くれれば良い、またはどうしても駄目なら「一応当所へ入院なさい」（四三頁）といったものになるのも必然であろう。

この問題を整理するためには、考え方を切り替える必要がありそうだ。彼らがもちろん「完治」を願っていることは疑いない。だからこそ、回復の手がかりを求めて必死で先行テクストを熟読し、そこに示された枠組みに重ねて自らの病を意味づけていたのだ。しかし同時に、そうした先行テクストにおいて類型化された診断・治療の枠組みに合致しきれない余分な部分を、彼らはどうしても切り捨てることができないのである。余分な部分にこそはっきりと示される、自分だけの経験や感覚。彼らが書き綴らずにいられなかったのは、そうした〈わたし〉の個別性とでも呼ぶべきものだったのではないか。

ちなみに、相談欄の冒頭に毎回掲げられた注意書きには「本誌上に掲載する際には必ず変名を用ひ、決して御迷惑は掛けません」（一三（一）～）という規定が記されていた。男性相談者は、その質問文の末尾で「以上乱筆にて苦しさのあまり、肉親にも恥ずかしくて云へない心の秘密を、赤裸々に書」いてしまったことを詫びているが（四三頁）、それが古峡のみならず多数の読者の目に触れる可能性は十分理解していたはずだ。それでもなお、書くことを選んだ彼が心のどこかで望んでいたのは、自身のなかで抱え込んだ「云へない心の秘密」という個別性を、書き綴るという行為を通じて外の世界へと開け放つことだったように思われる。

『黎明』の完治体験録が、類型化されたプロットに〈わたし〉を当てはめることで、「完治」へと導いていく仕組みとなっていたことを思えば、先述の「T」の体験録のようなあからさまな反抗こそ示されてはいないものの、それは〈異端〉的な欲望であったともいえる。ただし、振り返ればこうした欲望や感性は、前期『黎明』の頃からすでに、ところどころで顔をのぞかせていた。

一九三七年一月号（四（一））には、療養者が執筆した小説「夕日に歎く」が掲載されている。本作は神経衰弱から引きこもりとなり、入院することになった男を主人公とする物語だが、それは「完治」へと向かう教養小説（ビルドゥングスロマン）としては書かれていない。焦点はあくまで、家族との葛藤を回顧し悔やむ主人公の姿それ自体に当てられている。

さらに当号の編集後記では、編集担当者の告白めいた内向的な文章が綴られている。「夕日に歎く」の掲載などによって当号が充実した

ことを言祝ぎつつも、正月を迎えると自分が成し遂げたこともないまま「青年と云はれる時代と決別」しつつあることの辛さを実感し、「近頃は悲しくなる」ばかりなのだという（四九頁）。その後に続く、「会員諸氏には、小生の如き御仁は恐らく見当らぬ事」であろうし、充実した誌面をみれば、自分の「安価なセンチメンタリズムに苦笑を禁じ得ない」といった弁明の繰り返しが逆に示すのは、無意識的にせよ、〈わたし〉のこの感慨をなんとか書き残しておきたいという、書き手の想いの根強さであろう。

もうひとつ例を挙げておきたい。一九四四年四月号（一一（四））の全治体験録欄「発病から全治まで」の末尾には、「独白（病室にて）」と題する次のような「体験録」が掲載されている。

毎日物を食べては眠る。昨夜は久振にて風呂に行き、孤独の部屋に帰りてぼつ然と坐してゐた。このまま此処に続けてゐたい。だがこの孤絶の感は一体どうした事だらう。不安のやうなもの、感情の鈍麻したやうなもの、どうも元気といふものがない。ぢつと火鉢にあたつてゐる。中原中也の夜曲といふのを思ひ出す。（九八頁）

文体からも察せられるように、この「体験録」は全治体験録の欄に掲載されながらも、類型化された体験録のスタイルに迎合しようとはしていない。日記文の体裁を採用し、「全治」までの物語とは異なった、療養生活における日常の一節が切り取られていく。

興味を惹かれるのは、そこで「中原中也の夜曲」が想起されている点だ。前掲（図表1）の中也の詩「道修山夜曲」では、「星の降るような夜」に、療養所を取り囲んでいた松林を思わせる「松の林のその中」で「蹲（しゃが）んで」いる「僕」の姿が描き出されている。夜空という無窮ともいえる世界の広がりに包まれながらも、「僕」は「風もなく」「しづもりかへつてゐるばかり」の松林のその中で小さく固まっていく。折しも見えた「あの汽車」も、ここではない「何処」かへと走り去る。それは、ここから動くことのない「僕」とのコントラストを成すことで、残された「僕」の孤独と静謐な心境とを一いっそう浮かび上がらせていくことになる。

「独白（病室にて）」の書き手は、療養生活における自身の「孤絶」感を、こうした「夜曲」の詩情と重ね合わせて理解していく。この「体験録」は、中也作品を同時代の読者がどのように読み、消費していたのかを示す貴重な事例ともいえるだろう。その上で、さらに考えておきたいのは、中也というひとりの詩人が書き上げた「夜曲」と、この書き手の個別的な経験や感覚とが、『黎明』という場においてはからずも結びついてしまったことの意味だ。書き手は、たんに先行する「夜曲」に合わせて自分の経験・感覚を書き綴っているのではない。個別に立ち上がってきた書き手の経験・感覚が、すでに個別に立ち上がっていた「夜曲」の経験・感覚と誌面を通じて出会い、つながりあっていく。これは〈調律〉的な関係性というよりも、いうなれば

〈共鳴〉的な関係性として捉えるべきものかもしれない。

共鳴という現象は、音叉を用いた共鳴実験などで目にしたことのある人も多いだろう。ある振動体が、その固有振動数に等しい外部振動の刺激を受けることで、振幅が増大するという現象である。

他者からの刺激を受け止め、反応するかたちで〈わたし〉の個別性を開け放つこと。そこに示唆されているのは、〈わたし〉がその個別性を損なうことなく、他の〈わたし〉の個別性とつながり合える可能性である。

『黎明』に散見された個別性を書き綴る様々なテクストの多くは、直接的な影響関係のもとに書かれたものではなかっただろう。しかし、それらはともに、『黎明』の積み重なる巻号を貫いてかすかに響いていた、〈わたし〉だけの経験や感覚を書き綴りたい、伝えたいという欲望の振動／音に〈共鳴〉した存在たちが、その時々の誌面にあらわれ出たものだったのではないだろうか。

## 五　エゴ・ドキュメントの集積としての『黎明』

本論ではここまで、雑誌『黎明』の大まかな輪郭を通史的に描き出しながら、誌上で作動していた権力のエコノミーの分析を試みてきた。『黎明』が、類型化された物語へと自らを重ね合わせることで〈わたし〉を安定させようとする力と、他の誰とも同じではない〈わたし〉の個別性を語ろうとする力とがひしめき合いつつ展開してきた雑誌であったことがみえてきたといえるだろう。

中村古峡診療所・療養所を母体とし、療養者の「完治」を志向する本誌には、古峡療法への〈信仰〉を徹底させようとする、あるいは違反する存在を〈異端〉として排斥しようとする権力が強く働いていた。ただしそれは、単に人々を抑圧していたのではない。権力の導きに従った多くの療養者たちが、完治体験録などの先行テクストを用いた自己の〈調律〉を通じて、より生きやすい自己像を獲得し得ていたという事実は見逃してはならないだろう。また、強力な規範が作り出されていたからこそ、そこに当てはまり切らない〈わたし〉が対比的にはっきりと照らし出され、個別性を書き綴らずにはいられない人々を誌面に誘い出すことになったとも考えられる。本誌の権力のエコノミーは、二方向の〈自らを書き綴る人々〉を生み出していたのだ。つまり、雑誌『黎明』とは、近代日本の精神医療の周辺で紡がれていた多様なエゴ・ドキュメントの集積でもあったといえよう。

近年、歴史学の領域を中心として、エゴ・ドキュメント研究という新たな潮流が注目を集めている。エゴ・ドキュメント、すなわち一人称で語られた手紙・日記・自叙伝、あるいは法廷で強いられた自己の証言といったものまでを含む〈自らについて語る〉様々な資料は、主観に偏り十分な客観性が保証できないものとされてきた。だが見方を変えれば、偏りがあるからこそ「語り手の視点から外側の世界をみる手段」となり得る。それは既存の歴史学が看過してきたような、人々の「記憶・感情・欲望・知識・意味などの主観性を考察しうるという

利点」を持ち、さらには語る主体を構築する「複雑な社会的・歴史的過程」を逆照射する手がかりともなるという[11]。

こうした議論を踏まえると、やはり「完治」へと向かって類型化された全治体験録のようなエゴ・ドキュメントよりも、その枠組みでは語りきれない〈わたし〉を書き綴ろうとしたエゴ・ドキュメントの方に、より興味がかき立てられる。なぜ読者たちの一部は、『黎明』という雑誌に、わざわざ〈わたし〉の個別性を書き出そうとしたのだろうか。そこにはどのような「複雑な社会的・歴史的過程」があったというのか。

考え得る背景を、二つ挙げておきたい。ひとつは少し大きな話とはなるが、近代社会における生権力の浸潤である。フーコーは、近代社会で性に関する言説が爆発的に増加していった背後に、人々が性について語ること、告白することを要請する権力が存在していたことに注意を促している。それは近代国家の性を通じた人口管理の欲望とも結びつきながら、人間の生に積極的に介入し監理することで〈生きさせよう〉とするタイプの権力、すなわち生権力と呼ぶべきものであった。そうした権力の下では、倒錯した欲望はただ排除されるのではない。権力の側にとって、それは倒錯を監理するために語られねばならず、また倒錯を語る側にとっては、語るという行為自体が監理をすり抜ける快楽をもたらす。ただ、その時はすり抜けたとしても、それが結果的にさらなる権力の強化・拡張の呼び水となっていく。このとめどない「螺旋」のなかで、倒錯した欲望を語ることの価値は高まり続けてしまうのである[12]。

『黎明』相談欄でみられた、類型化された「神経質」の語りでは説明しきれない〈わたし〉を書き綴ってしまう投書者たちを思い出してみよう。近代の生権力の一翼を担った知である精神医学・医療からすれば、彼らの経験・症状は権力の監理領域を拡張する足がかりとなり得る新たなサンプルであり、まさに語られなければならないものであった。穿った見方をするなら、投書者たちは主体的に振る舞っているようにみえて、実は権力の呼びかけに応じて〈わたし〉を語らされてしまっていたとも考えられよう。

考え得る背景のもうひとつは、近代日本の雑誌文化、なかでも特に投稿欄をめぐって形成されてきた伝統である。日本においては、明治期から文芸雑誌（『穎才新誌』一八七七～など）や少年・少女雑誌（『少年世界』一八九五～、『少女の友』一九〇八～など）を中心として、読者の投稿が誌面で大きな役割を担う雑誌が数多く刊行されてきた。この伝統は大正・昭和期にも拡大しつつ引き継がれ、少女雑誌『令女界』（一九二二～）が読者からの増え続ける投稿に対応するために、新たに文芸と投稿を主とした姉妹誌『若草』（一九二五～）を創刊することになったというケースまであらわれてくる。

この『若草』を例とすれば、誌面には短歌・俳句・詩・随筆といった各ジャンルの入選作が掲載される「読者文芸」や、読者仲間に向けたメッセージ発信の場となる「座談室」など、読者投稿を受け入れる欄が複数用意されていた。そこには時に、読者たちの憧れの的となる

スター投書家があらわれたり、プロレタリア文学をめぐる甲論乙駁の論争が展開されたりと、雑誌の活力の源泉として機能していたのである。

一方で、『若草』投稿者たちの活動が、文壇で活躍する作家や論壇に進出するような評論家を生み出していくことはなかった。原因は投稿欄のレベルの低さというよりも、読者たちが何を求めて投稿し続けていたのかという問題におそらく関わっている。彼らが投稿欄で倦むことなく繰り返していたのは、自分の意見を開陳することや、肯定にせよ批判にせよそれに反応してもらうこと。または、仲間の作品に感動したことを伝え、他の読者とも共有することであった。本論の鍵語を用いるならば、誌面を媒介に仲間たちと〈共鳴〉し合うこと自体が欲望されていたといえるだろう[13]。雑誌とは、人々のそのような欲望の受け皿となり得るメディアとして発展を遂げ、近代日本の文化の一端を支えていたのである。

思えば『黎明』も、最初は会員同士の「聯絡機関」の必要から企画されたものだった。本誌上に〈わたし〉の個別性を書き綴ることを後押ししていたのは、おそらく自己表現の欲望のみではない。同時代の雑誌文化によって培われてきた、読者の誰かがきっと〈わたし〉を受け止めてくれるはずだという信頼があったからこそ、彼らは書き綴ることができたのではないか。近代の私的な日記などにしばしば書かれた私秘的な〈わたし〉とも異質な、雑誌というメディアの特性に依拠しつつ〈共鳴〉を希求する〈わたし〉たちの姿が、そこには浮かび上がっているように思われる。

## おわりに

最後に、『黎明』の終刊とその後について触れておこう。前期『黎明』の先行テクストを用いた「完治」システムがリセットされたこともあり、後期『黎明』には新規読者たちの投書をはじめとする、新しい風が吹き込みつつあった。ところが、これからというところで古峡が「脳溢血」を発症し、「到底従来の職務に堪へ得ざるに至りたるため」（「廃刊の辞」一四（九）一四六頁）、一九四八年九月に、およそ一四年にわたるその歴史の幕を下ろすことになった。

この後、中村古峡療養所は中村病院への改称（一九四九）や古峡の死去（一九五二）を経て、変革の時期を迎えていく。その渦中にあった一九五三年一二月に、開放棟の患者有志たちによって創刊されたのが「県下唯一の精神病院の患者新聞」である『開放新聞』だった[14]。古峡資料群のなかに紛れ込むようにして残されていた四部（一三・一七・一八・二一号）は、『黎明』のような活版印刷ではなくガリ版刷りとなっている。サイズは、およそB4で両面印刷が多いが、B4タブ（二七二㎜×三八二㎜）程度の用紙を二つ折り四面とするもの（一三号）もあり、ばらつきがみられる[15]。

『黎明』と比べると、印刷物としての質も、記事の分量も劣っていたことは否めない。ただし、紙面（二一号）には院内イベント告知（「会

と催し」）、退院者の現状報告（「なつかしいＯＢだより」）、編集者からの提言（「共同作業について」）、外部からの来信紹介（松沢病院医長・江副勉より）、読者からの投書（「読者の声」）、患者たちの自作俳句（「俳壇」）等々が掲載され、少しでも読みがいのあるものにしようとする編集担当者たちの意気込みが感じられる。

当時は、ちょうど中村病院でもコントミン（クロルプロマジン）の使用が始まり、「戦前型治療の時代」から「向精神薬の時代」への端境期にあたっていた[16]。精神医療のパラダイムが大きく変容しつつある中で刊行された『開放新聞』には、もう以前の『黎明』が担っていたようなレベルの治療的役割が与えられることはなかった。また、ひとつひとつの記事が極端に短くなったこともあり、そこから他とは違う〈わたし〉の個別性などをはっきりと読み取るのも困難である。

そこに主として残されたのは、退院者たちも広く含む、中村病院の仲間たちのつながりの基盤としての役割だった。良くも悪くも『開放新聞』は、小さなコミュニティにおける〈普通〉の定期刊行物となっていたといえそうだ。

してみると、一医療機関の所内で編集されていたメディアにすぎない『黎明』が、あれほどの多面性と高い熱量を誌上で維持し続けていたのが、いかに特異なことだったかがうかがわれる。古峡という存在や、彼の療法の独自性とその可能性に引き寄せられた患者たち、そしてそれらを取り巻く近代日本の生権力や雑誌投稿をめぐる文化といった様々な要素が、一所でせめぎ合っていたからこその結果だったといえよう。

あたかも地下にひそむプレート同士が、押し合うことで地上に隆起していくように、この時代に潜在した権力構造や欲望がぶつかり合い、予期せぬかたちで浮かび上がってきていた場。それが『黎明』という雑誌だったのである。

## 付記および謝辞

・本章引用では、旧漢字は適宜新漢字に改め、仮名遣いは本文のままとしている。また引用文中の傍線は引用者によるものであり、［　］内は引用者による注である。
・史料調査にご協力いただいた医療法人グリーンエミネンス 中村古峡記念病院に感謝する。
・本研究の一部は、JSPS 科研費 JP19H01234の助成を受けたものである。

## 注

1 一九二七年に日本精神医学会診療所として開設（前身となる日本精神医学会診療部は一九一七年開設）。『黎明』創刊時には中村古峡診療所と呼称されている。一九四五年に空襲で全焼。

2 資料群から中原中也の療養日誌等の資料が発見された経緯については、「特集 中原中也」（『ユリイカ』三二（八）二〇〇〇・六）が詳

しい。また中也と古峡の療養日誌を通じたせめぎ合いについては、拙論「自己を書き綴り、自己を〈調律〉する」（『無数のひとりが紡ぐ歴史』文学通信　二〇二二）を参照のこと。

3 北垣徹「権力の新たなエコノミー」（『フーコー研究』岩波書店　二〇二一）四〇一頁。なお、杉山吉弘（「エコノミー概念の系譜学序説」『札幌学院大学人文学会紀要』九七　二〇一五・三）は、〈エコノミー〉とは基本的に「統御あるいは統御系」という意味で捉えられる語であるとしている。

4 古峡資料群に現存する巻号のうちで確認できる最初の号。以後本論では、残されている巻号のみでは連載等の開始・終了のタイミングが判断できない場合、現存する巻号で確認できたものまでを挙げ、その末尾に「?」を付してその旨を示すこととする。

5 七巻途中からしばらくの間、「評論」欄自体が休止しており、古峡の評論が掲載されない時期があった。息子たちの学術的な評論は、その穴を埋める役割も担っていたと考えられる。

6 当該解説は、拙論（二〇二二）における説明を一部引用しつつ再構成したものである。

7 療養期間の各期の呼称や期間は時期によって異同がある。本文で挙げた区分は『中村古峡療養所案内』（一九三九）による。

8 中村古峡『神経衰弱と強迫観念の全治者体験録』（主婦之友社　一九三三）三〇五、三四八頁

9 『神経衰弱はどうすれば全治するか』に載せられていた〈神経質療法の一般法則〉は一二則だったが、そこに〈神経質療法の根本法則〉として同書に載せられていた二項目（「神経質の治療は絶対に薬剤に頼ってゐてはいけない［『黎明』連載時は「絶対に」は削除］」「病気は医者が療すと思ふな」）を追加して「一四ヶ条」としたもの。

10 両書ともに、『黎明』に連載してきた評論を一冊にまとめたもの。『強迫観念の全治法』第一編の各章は、再開後の一三（一）-（七）に連載されている。『神経衰弱の正体』の各章については未所蔵の号に掲載されたものらしく詳細は不明。

11 長谷川貴彦「エゴ・ドキュメント研究の射程」（『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店　二〇二〇）

12 フーコー、ミシェル（渡辺守章訳）『知への意志』（新潮社　一九八六）

13 『若草』の投書欄とそこでの論争については、拙論「『若草』の波紋」（『文芸雑誌『若草』』翰林書房　二〇一八）を参照のこと。

14 「十七号の発刊に際して」（『開放新聞』一七　一九五五・四・一一）

15 一三号（一九五四・九・二八）、一七号（一九五五・四・一一）、一八号（同・七・六）、二一号（一九五六・二・一一）が残存。「病院年譜」（『中村古峡と黎明』医療法人グリーンエミネンス　一九九七）によると、『開放新聞』は二三号（一九三一）から、タブロイド版活版印刷の『院内ニュース』となる（当資料については未見）。

16 岡上和雄「１９５３年（ＴＶ放映開始）から５６年（もはや戦後ではない―経済白書）までのころの中村病院のこと」（前掲『中村古峡と黎明』）五〇頁